

孝子物語

養老

ようろう

こしもの

がたり

養老孝子源丞内の会発行

孝子物語の発刊にあたり

この度、養老孝子源丞内の孝子物語の発行にあたり、皆様方に御愛読を望み
心情の一言を申し上げます。

御愛読頂き、今日の世情は大変残念な状況と思ひます。今日迄我々が事無
く安心して毎日暮らす事が出来たのも、御身族を始め世間の皆様方のお助けで
頂いて居るおかげと感謝をして居りますが、現状は人助けの好い事が少なくな
り、悪事が多く報道され居り人助けの報道は少なくなって居る現況です。

皆様と一丸となって、先祖先人に感謝と御恩返しの一助として、御先祖を始め
先人先輩に感謝の心遣い、住みよい社会・地域造りの実現の為に皆様と一緒に
なって頑張り、御恩返し出来る様に頑張りませう。皆様方の御多幸と御
活躍を祈念致します。

平成十年四月吉日

養老孝子源丞内の会

会長 古川利雄

お酒になった養老の泉

むかし、むかしの話や。そーやなあ、
千三百年もむかしの話や。

多度山のふもとに若い男と年よりのおっ
父さんとふたりぎしで住んじよった。

若い男の名は源丞内といった。大変、
びんぼうやったが、とつてもええ男やった。
とつても、働きもんで、朝、早ようから、晩
おそーまで、働いとつた。山へ行つては、
たぎぎを拾って、それを米やなんかと、かえ
ことしとつたんやて。

おっ父さんは、まあーだいぶ年やし、病氣
でな、目はあんましよー見えん、まあちい



とは見えたけどもな。足も弱てほとんど歩け
んのやわ。

そんなおっ父さんに源丞内はようつかえ
とった。おっ父さんの楽しみは、晩に飲む
少しの酒なんや。この酒をふくべに入れて
買ってくるんが、源丞内の楽しみでもあつ
たんや。なんしょ、おっ父さんが子どもの
ようによろこばせるもんやで、どうぞして
酒を買って帰らんと、と思って、いっしょう
けんめい、たきをひろうとったんや。
そんな源丞内におっ父さんは、



「すまんこっちゃんなあ、お前。いつも苦労
かけて」
と言わせるんや。すると息子は
「何、言っちゃるんや、水くしゃあわ」
と言って、毎日働いとった。
こころへの山は夏はあつついし、冬は、
さぶいし、そらまあ、なんぎなもんや。
ちよっと山んなか、ひやあると、昼でも
まっ暗やで、おそぎやあもんや。それでも
いっしょうけんめい源丞内は、働いちゃった。
そんなもんや、いっつもうみやあちようし
に、お酒が買えるとは限らんかった。いや、
買えん日がつづくようになったんや。
ある日のことや、つかれた源丞内は、
山のふもとで腰掛けていっぶくしとった。
ほーしてお滝を見ながらこんなこと考え
ちよったんや。

『あの滝が、お酒やったらなあ、おっ父さん、
よろこばせるになあ。それにしても、
今日もお酒が買ってけなんだなあ』



疲れきってまって、ぼさーとしちよったん
やろなも。ふらふらと歩いちゃったにちぎや
あねえ、つるつとすべってまったんやわ。
なにしろ、苔がいつびやあついとる岩だで、
よっぽど気いっけんとだちかんのに。源丞
内は、そのまんま、岩のあいさをすべってっ

て、どしーんと落ってまって、気いうしなわ
してまった。

そうしちよるまに夜になってまった。

源丞内は、夢見ちよるような気もちやつ
たが、だんだん気がついてきた。耳の遠くの
ほうでは、お滝の落ちる音がするし、川の
せせらぎも聞こえてくる。ほーして、不思議な
かざがしてくるんや。甘いような。こうば
しいような。いったいなんやしゃん。そう
思うてあたりを見わたしたんや。

そうするとさいが、少し横ちよのところに、
こんこんと泉がわき出ちよるんや。どーも、
この良いかざは、ここからしてくるらしい。
おそが、おそが、寄ってみると、たしかに、
良いかざがしてくるのは、ここからや。
そばまで近づいてみると、このかざは、
お酒のかざのようにちよる。

『まさか、お酒がこんなところからわき出てくるわけあらへん』

と思いつながら、源丞内は、両手でくんでみて少しなめてみたんや。

「これは、うみゃあ！」

ほんとーうに、びっくりしてしまつて、腰ぬかさんばかりやった。

源丞内は、お酒は飲んだことあらへんだ



けど、これはまちがいなくじょうとうのものやとわかった。ふくべにつめて、ちゃっと家へと急いだ。

家へ帰つて、この話をする、おっ父さんは「そんな、たわけたことがあらずか、夢、みちよつたんやあらへんか？」

といつて、ふくべをかたむけて茶わんにくんだ。ほうして飲んでみるとさいが…。

「うみゃあ！これは、まさしく酒や。こんなうみゃあ酒、飲んだことがにやあ」

といつて、大よろこびや。

そんなことがあつてから源丞内は、いつもその水をくんで帰つた。

そうして、おっ父さんに飲ませて、自分も少し飲んだ。二人は、いっつも楽しそうに

笑いあい、今までより、まっとまっと仲よくらしちよつた。



そのうち、不思議なことが、おこつたんや。あんなに元気がなかつたおっ父さんが、だんだん元気になつたんや。前は、足が弱て歩けんかつたけど歩けるようになりんかつた。背中も曲がつちよつたけど、ぴーんとしやつた。目もしよぼしよぼしてよー見えんかつたはずやつたのに、よう山を歩いちよらつせるようになつた。

「こりゃあ、ありがたいこつちやなも。ちゃんと目も見えるし、歩けるようになったし、きつとあの酒のおかげや」

とおっ父さんはいうと、源丞内は

「そうやな、水がお酒になるのもへんやし、あれは、きつと神さまが与えてくんかつたありがたい水や、そまつにするとバチが当たるわなも」

といったんや。そうやつて二人は、お酒を

大切に、毎晩少しづつ飲んだんや。ようみるとおっ父さんの顔はつやつやしとるし、あんなに、まっ白やつた頭も黒うなつてまつとる。ほんにありがたい酒や。

まあ、こんなええ話は、人に伝わるのは早いわなも。あつちこつちの人んたが、源丞内のとこへ聞きにやつてくる。

正直もんの二人は、別にひとりじめすることのう、みんなに教えてやつたんや。

まんが 孝子物語

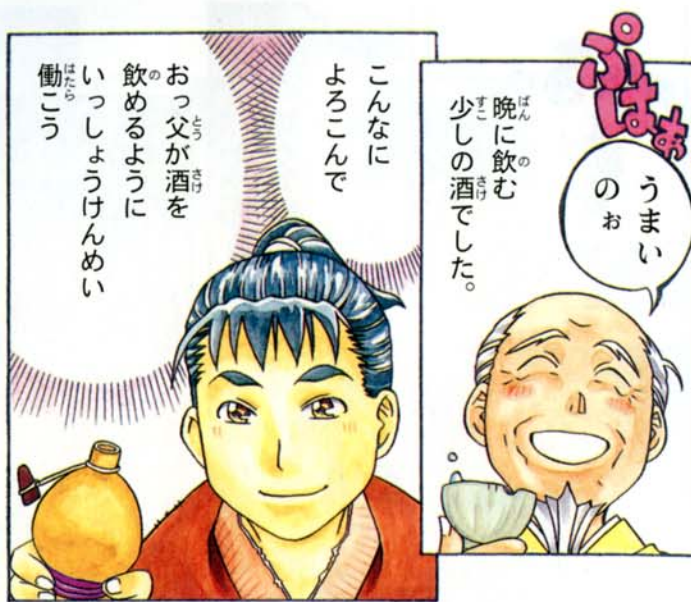
こ う し も の が た り



そんなもんで、この村の近くには、病人は
おらんようになってしまった。
こんな話は奈良の都の四十四代帝のとき
までとどいた。そうして、ついに帝は、何人
もの家臣とともに、何日かけて、たしかめ
るためにこの村までござつ
たんや。
そうして源丞内や村の
みんなが見守るなかで
泉の水を飲んでみて、
「まさしく酒じゃ、これ
源丞内。これは正に
神さまのおぼしめし。
親孝行のお前への気持
ちが天に通じたのじゃ。
そうだ、この地を養老と
名付けよう。源丞内、



お前がこの地を治めよ」
といわした。
「とんでもございません。私などとてもとて
も……」
と源丞内はことわったんやけど
「お前が父親を思う気持ち
で治めれば良い」
といわした。
そうして、帝は年号も
養老と改めやしたんや。
まあ、この泉は養老神社の
中にある養老神社の
わきにある菊水の泉やて
言われちよるわなも。
そうそう、養老神社も
源丞内が開いたんやて。





滝の水を飲んで
楽しく暮していると
不思議なことが
おきました。



めも見えるし
歩けるぞ

あの酒の
おかげじゃ



きっと神様が与えて
くださった水だよ



お酒を大切に
毎晩少しずつ飲むと

お父さんの顔は
つやつやとし、
白かった髪も黒く
なっていました。



よかったな
おっ父

この話は
多くの人に伝わり、



ついに、ときの女帝
四十四代元正天皇の
ところまでとき、



帝はこの話をだしかめる
ために当地においでに
なりました。



お前が父を
思う気持ちで
治めればよい



帝は年号を養老と改め、
「美泉を以て、老を養ふべし」

元正天皇

源承内はお父さんへの感謝を
いつまでも忘れず、お互いを
思いやりながら暮しました。



これは正に神様の
おほしめし

親孝行の
お前の気持ち
が天に通じたのじゃ



まさしく
酒じゃ
源承内、



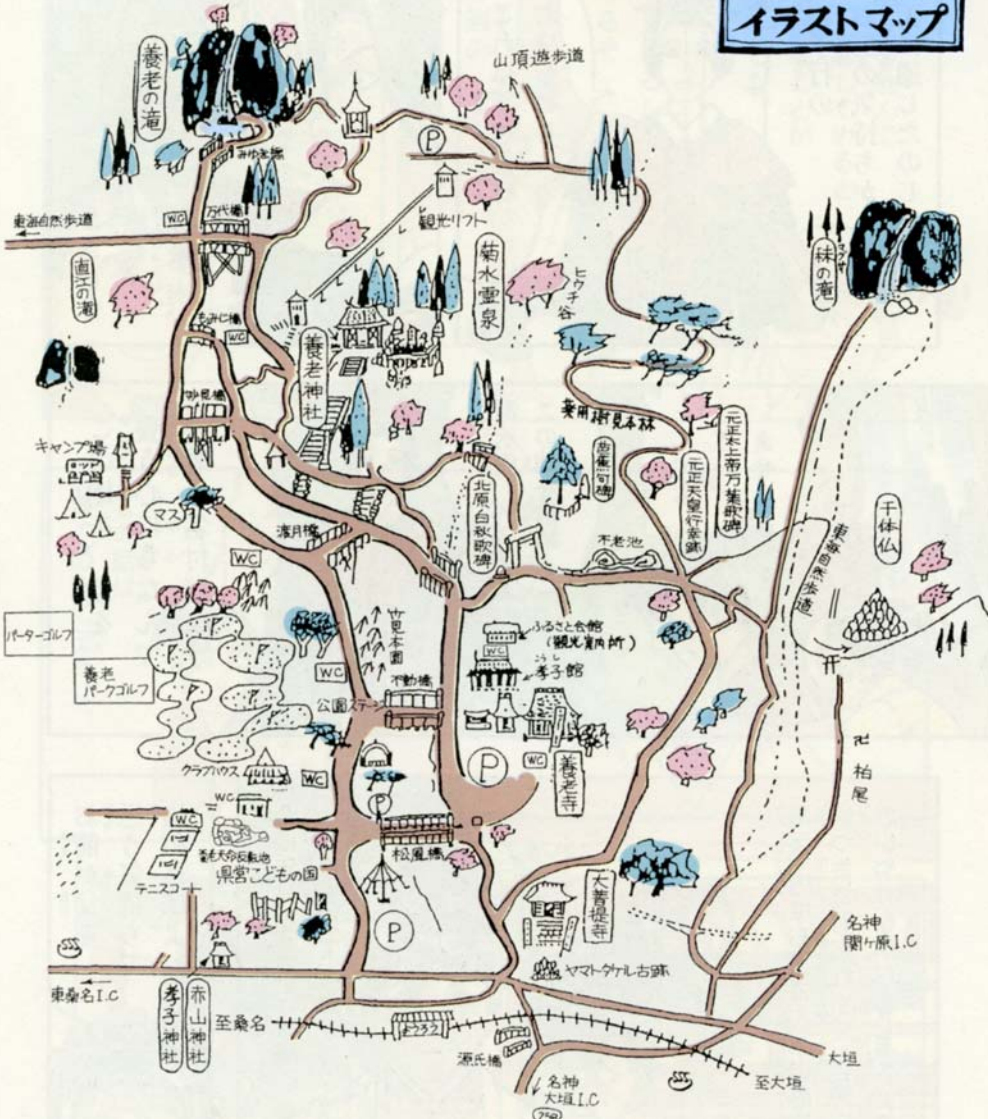
この地を、老を
養う心にちなんで
養老と名付けよう、

源承内
この地を治めよ

とんでも
ござい
ません



養老自然公園
イラストマップ



養老孝子源丞内の会

事務所 岐阜県養老郡養老町高田 506-7

(株)古川興業事務所内

古川利雄

TEL 0584-32-1285

印 刷 盛 福 印 刷